ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 2 問題～第 3 問題　試訳

石田　隆太／本間　裕之

はじめに

本稿は、ドゥンス・スコトゥスの『「命題集」講義録』（レクトゥラ）第 2 巻第 3 区分第 1 部「個体化の原理について」第 2 問題～第 3 問題の試訳であり、以下の前稿の続きである。凡例についてもこの前稿を参照されたい。

石田隆太、本間裕之、「ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 1 問題　試訳」、『筑波哲学』26 (2018): 123–38.

この稿から註にて新たに使用した略号の一覧は次の通りである。

Gondras

Gondras, A.-J. (ed). *Questions disputées ordinaires*. Tom. I–III. Louvain - Paris: Éditions Nauwelaerts - Béatrice-Nauwelaerts, 1968.

HGQ

Quodlibeta Magistri Henrici Goethals a Gandauo, Doctoris solemnis, Socii Sorbonici et Archidiaconi Tornacensis cum duplici tabella. Paris: Ab Iodoco Badio Ascensio, 1518.

Pickavé 2011

Pickavé, M., “Henry of Ghent on Individuation, Essence, and Being,” in *A Companion to Henry of Ghent*, ed. G. A. Wilson, Leiden - Boston: Brill, 2011, pp. 181–209.

VAT

Ioannis Duns Scoti, opera omnia, studio et cura Commissionis Scotisticae, ad fidem codicum edita. Civitas Vaticana: Typis Polyglottis Vaticanis, 1950–.

加藤 1998

加藤雅人、『ガンのヘンリクスの哲学』、創文社、1998.

本間 2019
本間裕之、「ドゥンス・スコトゥスの形相的区別について――意味論的観点から」、『哲学』（日本哲学会）70 (2019): 250–65.
本間 2017
本間裕之、「ドゥンス・スコトゥスにおける個別者認識の可能性」、『論集』（東京大学哲学研究室）36 (2017): 95–108.

まず第 2 問題は、質料的実体の個体性が内在的かつ肯定的なものによって存在するのか否かを問題とする。然りと答えるのがスコトゥスの立場であるが、この箇所は同時に、否と答えるであろうガンのヘンリクスに帰される二重の否定説を批判することを意図している。第 40 段落で示されるように、二重の否定説とは、或るものが数において一ないし個体であることを、①それがそれ以上分割されないことと、②それが他のあらゆるものから区別されたものとして分割されていることの二つによってのみ理解する考えである。

二重の否定説について本格的に論じる前に、スコトゥスは第 42 段落で問題の正確な理解を提示する。質料的実体が単数、一、個であるのかどうかが問題とされる場合、まず彼によれば、それは第二志向としての単数性（あるいは一性および個体性）を問題にしているのではない。また、数の原理である（実在的な）一性を問題にしているのでもない。むしろ問題とされているのは、質料的実体の個体化における最近接の理拠（ratio proxima）である。彼によれば、この最近接の理拠が肯定的なものであるのか否定的なものであるのかを問うことがここでの主要な探求である。

いよいよ第 43 段落から第 44 段落では、ヘンリクスによる二重の否定説がスコトゥスによって解説される。第 43 段落では、既に第 40 段落で言われていた、①それ自体における不分割と、②他のあらゆるものからの分割について改めて説明される。次に第 44 段落では、ヘンリクスによる二重の否定説が天使の認識論と関連のあることが言及される。ヘンリクスによれば、天使は個物を認識する際に普遍の生得的な形象を用いる。なぜなら個物は、種的形象以外には何らの認識原理も持たないからである。かくして個体の中には、種の本性以外には認識原理になるものがないのだから、種の本性以外に存在するものとしては、肯定的なものではなくて二重の否定のみが認められる。この二つの段落に対応する『オルディナティオ』の並行箇所（第 2 巻第 3 区分第 1 部第 2 問題第 47 段落）は極めて簡略化された記述になって

いる。曰く「この見解によれば、被造物における個体化は二重の否定によって行われると言われる。――『任意討論集』第五巻第八問を参照せよ」（中世思想原典集成 I.18, p. 238）[1]。『講義録』と『オルディナティオ』を対照させた場合に興味深いことには、第一に、そもそも前者はヘンリクス説の解説により多くの紙幅を割いている。第二に、前者は、第 43 段落では二重の否定について端的に解説する一方で、第 44 段落では天使の認識論との関連にも言及することにより、ヘンリクスの意見をより多角的に提示している。

第 45 段落から第 51 段落においてスコトゥスは、ヘンリクスの説に対する批判を大別すると六通り提示する。第一の批判を示す第 45 段落と第 46 段落で彼は、存在性（entitas）ないし形相性（formalitas）[2]の相反は肯定的なものによるということを主な論拠とする。「或るものの存在性に相反するものはすべて、その或るものにおける或る定立物のゆえにその存在性に相反する」という命題の証明を行う第 46 段落によれば、否定によって最近接の可能態が除かれることと、存在性ないし形相性が相反することは別々の事態である。彼は視覚と分割の例を挙げている。おそらくスコトゥスが言いたいことを推測すると、例えば或る視覚能力を持つものがいた場合、そのものに対して見えないものしか与えられない限りは、そのものは視覚能力を発動させることができない。そのような意味で、見ることの最近接の可能態は見えないものという否定によって除かれている。しかしだからといって、そのものが視覚能力をそもそも欠如していると言うことはできない。なぜなら、見えないものしか与えられない状況が変わって、見えるものが与えられるようになれば、そのものは視覚能力を発動させることができるからである。したがって、そのものにとって視覚能力がそもそも相反するものであることを言うためには、否定ではなくて何らかの肯定的な原因が必要である。

続けて、第二の批判を示す第 47 段落においてスコトゥスは、個的な質料的実体が持つ完全性の側にその個体性の根拠を求める。さらに、第三の批判を示す第 48 段落では、仮に二重の否定説を唱えるにしても、それがいまだ問題の解決に至っていないことを指摘する。彼によれば、依然として、個的な質料的実体において「本性が

[1] 以下でも渋谷克美による『オルディナティオ』の訳を必要に応じて引用するが、訳語の統一は敢えて行わなかった。渋谷訳の詳細な検討は他日を期したい（I）。
[2] スコトゥスにおける存在性ないし形相性に関する研究は多数存在するが、形相性を意味論ないし真理論の観点から扱った最新の研究としては本間 2019 がある（I）。

二重の否定を保持していることはどこからくるのか」という問題が残っているからである。第四の批判を示す第 49 段落では、単数のものが「単数である」という述定を受容する限りで、種的本性とは別に「単数」という述語の根拠になる肯定的なものを要請する。第五の批判を示す第 50 段落では、第一実体が第二実体よりも完全であるために、第一実体のみが持つ完全性の基礎となる肯定的なものをやはり要請する。最後に、第六の批判を示す第 51 段落では、二重の否定はあらゆる個体において同じ理拠を持つことに注目して、特定の自体的な不分割（および対他的な分割）があるために、やはり肯定的な原因を要請する。この第六の批判に対応する『オルディナティオ』の並行箇所（第 2 巻第 3 区分第 1 部第 2 問題第 56 段落）は具体例を用いている。曰く「ソクラテスにおいて二重の否定が存在するのと同様に、プラトンにおいても二通りの否定が存在する。だとすると、なぜソクラテスは（彼に固有な特定の）この個別性によって〈個〉であり、プラトンの個別性によって個ではないのか。［略］このことは、肯定的定立的なものによってのみ可能である」（中世思想原典集成 I.18, p. 242）。なお、『オルディナティオ』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 2 問題（第 49–56 段落）では、ヘンリクスの説に対する反論部分は大別すると五通りの批判から構成されている。ただしこれは、『講義録』における第二の批判と第五の批判が一つの批判に組み合わされたからである。それゆえ、この反論部分に関して、両著作の間に内容上の大きな相異はないが、総じて『オルディナティオ』の方が比較的明瞭な叙述であると思われる。

スコトゥス自身の見解を述べる第 52 段落は非常に簡潔であり、既述のことの繰り返しである。一言で言うなら、質料的実体において個体化の原因は肯定的な原因だということである。彼はこの肯定的な原因そのものに関する説明を第 5–6 問題に持ち越す。その上で第 2 問題の最後である第 53 段落では、第 40 段落に対する異論解答を示すが、その内容は第 51 段落などと重なるものである。彼は引き続き個体化の肯定的な原因を探求していくことになる。

次に第 3 問題は、質料的実体の個体性が現実的存立（exsistentia actualis）によって存在するのか否かを問題とする。ここで吟味されている見解は、第 55 段落によれば、個体の究極的な現実態として、現実的存立ないし「存立の存在」（esse exsistentiae）を想定する見解である。この見解を持つ者として、ヴァチカン版の註ではペトルス・デ・ファルコ（–1297）の名が挙げられているが（VAT, tom. 18, p. 244）、詳細は不明である。いずれにせよ、アリストテレスの『形而上学』第 7 巻の一節を根拠にし

ていることが特徴的である。

第 56 段落から第 58 段落においてスコトゥスは、この見解に対する批判を大別すると三通り提示する。第一の批判を示す第 56 段落では、現実的存立それ自体は何らの区別の原理でもなくて、それはただ何性的存在（esse quiditativum）、別の言い方をするなら「本質の存在」（esse essentiae）に即して変様するだけだと述べる。第二の批判を示す第 57 段落では、第 1 問題で論証されたように本性がそれ自体では個ではなかったのと同様にして、現実的存立もそれ自体では個ではないことを主張する。最後に、第三の批判を示す第 58 段落では、範疇的秩序づけ（coordinatio praedicamentalis）ないし諸実体の秩序づけ（すなわちポルピュリオスの樹）において現実的存立は居場所を持たないことを主要な論拠とする。すなわちスコトゥスは、類－種－個という秩序づけは現実的存立ないし存立の存在とは別の領域ですべて確定されると主張している。この第三の批判に対応する並行箇所（『オルディナティオ』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 3 問題第 63 段落）では次のようにも言う。曰く「〈人間〉が形相的に現実態としての存在を含まないのと同様に、〈この人間〉も形相的に現実態としての存在を含まない」（中世思想原典集成 I.18, p. 245）。存在と本質の区別が如実に前提されている。なおこの並行箇所は、『講義録』とは異なり、アリストテレスの『分析論後書』（第 1 巻第 20 章 82a21–22）を引用してもいる。

最後に、第 59 段落から第 60 段落でスコトゥスは、現実的存立を個体化の原理とする見解の論拠そのものについても批判的検討を行う。これは実質的に、第 55 段落で引用されていたアリストテレスのテクストをどのように読むべきかに関するスコトゥスの立場表明でもある。まず第 59 段落では、一般的に現実態が区別の原理であることを認める。その上で第 60 段落では、個体的区別の究極的な現実態は存立の存在のことではなくて、範疇的秩序づけに属するものであることを改めて主張する。新たな論点として彼は、存立の存在も区別の原理ではあるが、それは範疇的秩序づけの外でのことであり、また範疇的秩序づけによる区別に後続するものであることも述べる。この点に関しても並行箇所（『オルディナティオ』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 3 問題第 65 段落）の記述の方がより明快である。曰く「私は、現実存在が最終的に区分するものであることを真として認めるが、しかしそれは、範疇の体系自体全体の外側にある区分によるのである。この〈区分〉はほんとうの意味で附帯的なものではないが、しかしいわば或る意味で附帯的なものなのであって、何であるかという本質にもとづく体系全体に後続するものである。それゆえ、現実態としての

存在は、それが現実態である在り方にもとづいて〔附帯的な仕方で〕区別するのであり、――それが究極的現実態である在り方にもとづいて、〔附帯的な仕方で〕最終的に区分するのである」（中世思想原典集成 I.18, p. 246）。しかしながら、そもそもこうした記述の比較を行うためには、『講義録』のテクストを詳細に読解することが必要であることは論を俟たない。それゆえ、少なくとも本稿がスコトゥスの個体化論を理解するのに資することを確信している。

なお本稿は、下訳を I が作成した上で訳者二人が検討を加えて作成したものである（I）。

試訳

第 2 問題

質料的実体は或る内在的な定立物〔positivum〕によって個的であるのか

39. 前述の［第 1］問題に続けて、個体化の原因に関する他の意見のゆえに、質料的実体は或る内在的な定立物によって個的であるのかが問題とされる。

40. そうではないと思われる。

「一」〔unum〕とは二重の否定のみを意味する。すなわち、それ自体における不分割と他のあらゆるものからの分割［の二つ］である（実際、もし一が肯定的なものを表示したとするなら、「一なる有」〔ens unum〕は贅言であることになるであろう。それゆえ、一性は形相的に否定のみを意味する [3]）。それゆえ質料的実体は、或る定立物によってではなくて否定によって、数において一であり個的であることになる。

41. これ［すなわち第 40 段落］に反対する。

[3] Cf. ドゥンス・スコトゥス『オルディナティオ』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 2 問題第 45 段落「もし〈一である〉ということがなんらかのものを肯定的に定立する概念を意味するとしたら、〈存在するもの〉（ens）が意味するのと同じ概念であるはずはない。（なぜなら、もし同じ概念を意味するとしたら、「一なる存在するもの」と言うことによって、無駄な繰り返しを言っていることになるであろう。）しかしまた、〈存在するもの〉が意味するのと別な概念を意味しているのでもない。なぜなら、もし別の概念を意味するとしたら、どの存在する事物においても、或る存在性が別の存在性に付け加えられていることになるが、これは不適切であると考えられるからである」（中世思想原典集成 I.18, p. 237）。

第一実体[4]はそれ自体で生成する（[アリストテレスの]『形而上学』第 7 巻による）[5]。また第一実体はそれ自体で作用する（第 1 巻による）[6]。しかるに、こうしたことごとが第一実体に適合するのは、或る定立物によってのみである。したがって第一実体は、自身に対する或る定立物によって、個的であり数において一である。

I. 問題に対して

A. 問題の理解について

42. 第一に私は、私が問題をどのように理解しているのかを言う。すなわち、質料的実体が単数、一、個であるかが問題とされる場合、第二志向である限りでの単数性について理解されているのではない（というのもその場合、質料的実体は知性の作用によって単数だと言われるからである）。同様にして、数の原理である一性についても問題とされていない（というのは、事物が一だと言われるのは、それが一性によって量の類の内に形相的に属するような一性によってだからである）。むしろ問題とされているのは、自らの類における質料的実体の個体化にとっての、最近接の理拠は或る定立物であるか欠如体であるかである（私は、「一」が単に欠如か否定か肯定のみを意味するのかどうかを問題にしようとは意図していない）。そうであるにせよ、あるいはそうでないにせよ、質料的実体は、複数のもの――それらの内の任意のものは、下属的部分〔pars subiectiva〕[7]が自らの全体であるようにして、［分割される］当のものである――へと分割されることが自身に相反するような分割不可能性を保持する

---

[4] 第一実体および第二実体については次を見よ：ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第 1 巻第 26 区分第 44 段落「実体は二通りに受け取られる。一方の仕方で「実体」は、本性および何性である第二実体について言われ、他方の仕方では自存する第一実体について言われる」（VAT, tom. 17, p. 328, ll. 5–7）；ペトルス・ヒスパヌス『論理学綱要』第 3 巻第 6 段落；第 10 段落（I）。

[5] アリストテレス『形而上学』第 7 巻第 8 章 1033a24–33b19.

[6] アリストテレス『形而上学』第 1 巻第 1 章 981a16–20「行為〔実践〕や生成〔生産〕はすべてまさに個々特殊の事柄に関することだからである。たとえば、医者は決して人間なるもの〔人間一般〕を健康にする者ではなく、健康にするにしてもただ付帯的にである、すなわち、医者が健康にするのはカルリアスとかソクラテスとかその他そのような個々の名前で呼ばれる誰かをであって」（アリストテレス全集旧 12, pp. 4–5）。アリストテレスの原文は行為ないし作用の対象が第一実体であることを言おうとしているが、スコトゥスは逆にその主体が第一実体であることを言おうしていると思われる（I）。

[7] 部分となるものが主語となるような分割に関わるものとして、「主語的部分」と訳すことも可能である（H）。

のか否か、ということが理解される [8]。

B. ガンのヘンリクスの意見

43.〈意見の解説〉――したがって或る人々が言うことには、質料的実体は（自身に対する或る定立物によってではなくて）二重の否定によって個、これ〔haec〕、単数である。それは一方の否定を、それの下にあるものに対して保持する。なぜならそれの下には、それ以上分割されるものが何もないからである。――質料的実体は他方の否定を、それ自体のそばにあるものに対して保持する。その否定によって質料的実体は、そのそばにあるものと同じではないからである。そして以上のことこそ、事物のそれ自体における不分割と他のあらゆるものからの分割にほかならない [9]。

44. そしてまた、以上がヘンリクスの意図であることは、他の場所での彼の言明によって明らかである。そこで彼が措定することには、天使は単数のもの〔singulare〕を普遍的なものどもの生得的な形象によって認識する。なぜなら単数のものは、種の本性に対して何も付加しないのであるからして、他の認識原理を保持することがないからである [10]。したがって、種の本性以外に個体においてあるのは、ただそうした二

---

[8] 『オルディナティオ』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 2 問題第 48 段落では、石が具体例として用いられている :「普遍的な全体がその下位の部分へと分割される場合に固有なごとく、この石がそれ自身と同じである多くのものに分けられるということが、この石の中のいったい何が〈近接する根拠〉となってこの石に無条件に反するのかが、このような事柄についての問いであると理解されなくてはならない」（中世思想原典集成 I.18, p. 239）。なお、『オルディナティオ』におけるこの箇所から出発して、スコトゥスの個体化論を論理学的に読解する試みとしては本間 2017 がある（I）。

[9] ガンのヘンリクス『第 5 任意討論集』第 8 問題主文 ;『大全』第 39 項第 3 問題第 2 異論解答 ; 第 4 問題第 5 異論解答 ; 第 53 項第 3 問題主文。

[10] ガンのヘンリクス『第 5 任意討論集』第 14 問題主文 ; 第 15 問題主文（HGQ, f. 181 T–V）「いかにして天使が、単数のものにおいてともに観られる普遍の理拠において単数のものを認識するのかを見なければならない。［略］そのことを理解するためには以下のことが知られるべきである。任意の個別的形相は、その本性においては種の本質全体であり、志向においてのみ相異するものである。［略］その理由は次の通りである。それは、未規定の下で考察されている限りでは普遍である一方で、これ〔hoc〕において指示されている限りでは個別ないし単数である。そしてこうしたことは、加えられた否定によって、形相的かつ完結した仕方によってある。これにおいてそれ自体では普遍的形相は、その否定によってそのようにしてこれ〔haec〕であるように存している。［略］それゆえ単数の形相は、存在において普遍的形相に対しては否定以外の何も付加しないのと同様にして、認識においても何も付加しない。むしろ全くもって同じ形相が、普遍の理拠の下でより先に認識された後になって、単数の理拠の下で認識されており、事物に即して新しい定立物は何も認識において加えられない。［略］実際、もし天使が単数の個体化された形相をその普遍の理拠の下で知覚しなかったとするなら、普遍的である限りでの普遍的形相を除くとすると、天使は単数のものがそれによって知解されるであろうような可知的

重の否定だけである。

45. 〈意見の否認〉――しかしこれに反対する。

或るものの存在性に相反するものはすべて、その或るものにおける或る定立物のゆえにその存在性に相反する。しかるに、諸々の下属的部分へと分割されることは個的な質料的実体に相反する。それゆえ、その分割されることが個的な質料的実体に相反するのは、それにおける或る定立物のゆえである。したがって、それにおける否定のゆえではない。

46. 大前提は明らかである。その理由は次の通りである。否定が随伴し他の否定が保持されるということからは、「形相的相反の」原因は保持されない。実際、否定によって最近接の可能態は除かれるものの（例えば、見ることに対する最近接の可能態は見えないものによって除かれ、分割に対する最近接の可能態は量のないものによって除かれる [11]）、それでも「形相的相反の」原因は或る定立物でなければならない。それゆえ、もし諸々の否定が（不可能なものによって）消去されるとしても、相反の原因であるような或る定立物を措定しなければならない。それゆえ、或る質料的で個なる本性に複数のものへと分割されることが相反するのは、二重の否定のゆえではない。むしろそれにおいては、「この形相的相反の」原因であるような或る定立物がなければならない。

47. さらには、不完全性に属するものが或るものに相反しうるのは、その或るもの

なものの理拠を全く知性において保持しない。［略］それゆえ単数のものは、知性を動かすために、自分自身によって知性に自体的で第一の対象として現前化されなければならないであろう。なぜなら、単数のものが知性を動かすのは、ただその単数性の固有な理拠に即してのみであろうからである。［略］だがそれは偽である。というのも、普遍の理拠に即した普遍以外は、何も知性の第一で自体的な対象ではないからである」（I）。

[11] Cf. ドゥンス・スコトゥス『オルディナティオ』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 2 問題第 50 段落「もし実体が量を持たないと解されるならば、実体は分割されうるものでないことになり、（すなわち、直接的な可能性によって分割されることが可能でなくなるが、）しかしだからといって、分割されることが実体に反するわけではない。なぜなら、もし分割されることが実体に反するとしたら、それによって分割されることが形相的に可能となる量を受け取ることもまた、実体に反することになってしまうからである。したがって、同じ非物体的実体の本性が存在する場合においても、分割されるということは、本性それ自体に反することではない。同様に、もし〈視力を持たない〉ということが見ることの直接的な可能性を取り去るとしても、しかしだからといって、見ることが視覚に反するわけではない。なぜなら、（以前にこのように否定されたのと）同じ実在的な視覚の本性が依然として存続し、本性に反することなしに、この否定と反対の事柄がその本性に属するということがありうるからである」（中世思想原典集成 I.18, p. 240）。

における完全性のゆえのみである。しかるに、「多数のものへと分割されること」は不完全性に属する。それゆえ、このことが個なる質料的実体に相反するのは、それにおける完全性のゆえである。しかるに、否定は何らの完全性でもない。それゆえ、云々。

48．さらには、［第 43 段落における］前述の解答は問題を解決しない。なぜならそれは、「なぜ質料的個体は――それにおける本性に即しては――同じ本性に属する複数のものへと分割されえないのか」という自体的な問題そのものに解答していないからである。君は言う、「それは二重の否定、すなわちそれ自体における不分割と他のあらゆるものからの分割のゆえである」と。それでもやはり、より先に［第 42 段落に］あった他の問題、すなわち、そのものにおける本性が二重の否定を保持していることはどこからくるのかという問題が残る。それゆえ、前述の解答は個体化の原因を何らのものにおいても割り当てていない。

49．さらには、単数のものは自らに共通なものの自体的な述定を受容する。しかるに、自体的な述定は否定の理拠によってあるのではない。それゆえ単数のものは、それにおける或る定立物の理拠によってある。さて、もしそれにおける或る定立物が本性としての本性のみであったとするなら、下位のものについての「共通なもの」という述定ではなくて、同じもののそれ自体に関する述定があったであろう。

50．存在性は決して否定によっては構成されない。というのは、否定は常に、それにおいて存在性が基礎づけられる或る定立物を前提するからである。したがって、もし第一実体が本性と二重の否定のみを保持し、その否定は本性に対して完全性を付加しないなら、第一実体は第二実体よりも大きな完全性を意味しないであろうということが帰結する。――これは偽である。なぜなら、『範疇論』で言われるように、「第一実体は最大限かつ固有に言われる」からである[12]。

51．さらには、そうした二重の否定は「これ」と「あれ」において同じ理拠に属している。二重の否定がしかじかの不分割と矛盾を保持しているのは、ただ或るものにおいて肯定があるがゆえのみである。それゆえ、そうした二重の否定については、い

[12] アリストテレス『カテゴリー論』第 5 章 2a11–16「最も本来的でかつ第一義的そして最もすぐれた意味で、まさにそれであるもの（本質存在）と呼ばれるのは、ある何らかの基に措定されたものについて語られるのでもなく、ある基に措定されたもののうちにあるのでもない、という条件を満たすものである。たとえば、特定のある人間、あるいは特定のある馬がそうである。これに対して「第二の本質存在」と呼ばれるのは、第一の本質存在と呼ばれるものがそのうちに帰属する〈種〉、およびそのような〈種〉を包括する〈類〉である」（アリストテレス全集新 1, pp. 4–5）。

かにしてそれが同様のものども〔consimilia〕において複数化され分割されるのかという問題が残る。

C. 自身の解決

52. したがって、質料的実体の個体化の原因は諸々の下属的部分への分割の否定ではありえない。むしろ、肯定的な原因を与えなければならない――私が認めるのはそうしたことである。

さて、この肯定的な原因が何であるのかは、後で［すなわち第 164–72 段落で］明らかになるだろう。

II. 主要な理拠に対して

53. 主要な理拠［すなわち第 40 段落］に対しては次のことが言われるべきである。「一」が否定のみを意味すると言われていることは偽である（ちなみに、これが真であるのかそうでないのかは、他のところで明らかになるだろう[13]）。しかるに、一が二重の否定のみを意味するということが措定されても、やはり、その二重の否定の原因であるような或る定立物を問題とすることが残る。それゆえ、その二重の否定に対して或る定立物を与えなければならない。

第 3 問題

質料的実体は現実的存立〔exsistentia actualis〕によってこれであり単数であるのか

54. 質料的実体の個体化をめぐる第三の意見［Cf. 第 55 段落］のゆえに、質料的実体は現実的存立によってこれであり単数であるのかどうかが問題とされる。

I. 他の人々の意見

55. そして或る人々は次のように言う。［アリストテレスの］『形而上学』第 7 巻

[13] ドゥンス・スコトゥス『「形而上学」問題集』第 4 巻第 2 問題第 2 段落；第 4 段落；第 7 段落；第 9 段落；第 13 段落；第 7 巻第 13 問題第 17 段落。

によれば「区別することは現実態そのものに属する」のだから[14]、最終的区別は現実的最終物による。ところで、現実的最終物とは存立の存在〔esse exsistentiae〕[15]そのものである。なぜなら、［それに］先行する他のもの全体はいわば存在に対する可能態においてあるからである。それゆえ、同じ種に属する諸々の担い手〔suppositum〕――それらに究極の区別が適当する――は、ヒュポスタシス的に〔hypostatice〕区別されることを保持しているのであるからして、存立の存在によって構成されることを保持している[16]。

II. 意見の否認

56. これ［すなわち第 55 段落］に反対する。

現実的存立は、諸々の自体的な差異を保持せず、むしろ何性的存在〔esse

---

[14] アリストテレス『形而上学』第 7 巻第 13 章 1039a3–7「いかなる一つの実体も、完全現実的に存する諸実体から成りこれらを自らのうちに含むということは不可能だからである。というのは、可能的に二つであるのなら一つでありうるが、すでにこのように現実的に二つであるところの実体は、決して現実的に一つの実体ではないからである。たとえば、二倍の線は二つの半分の線から成っている、ただしその意味は可能的に半分の線〔半分に分割されうる線〕からというのである。完全現実態においてはすでに分割された別々の線であるから」(アリストテレス全集旧 12, p. 255)。

[15] ヘンリクスに由来する《esse essentiae》および《esse exsistentiae》については次を見よ : Pickavé 2011, pp. 189–204; 加藤 1998, pp. 121–45. 加藤は前者を「本質存在」、後者を「現実存在」と呼んでおり、渋谷克美も『オルディナティオ』の翻訳で同じ方針を採用しているが、本稿では主として訳出上の理由からこの方針を採用しなかった。《exsistentia》にしばしば《actualis》という形容詞が付加されて用いられているからである。ただし、《exsistentia》を「存立」と訳したのは極めて暫定的な措置であることを断っておきたい。なお、《esse exsistentiae》を個体化の原理とする考えがヘンリクスの説として取り扱われているわけではないことも断っておく（I)。

[16] ペトルス・デ・ファルコ『定期討論集』第 8 問題第 2 項（Gondras, I, p. 307）「一方の仕方では、或るものが一と言われるのは、完全な現実性ないし存在性に基礎づけられる完全な一性によってである。かくして、形相的な存在性として完全な存在性を持つものが一と言われる。かくして、哲学者［アリストテレス］が［『形而上学』第 7 巻第 13 章で］言うことには、現実態が分割する、すなわち、固有な現実態による完全で明白な分割によって分割する」; 第 3 項（p. 311)「質料はそれ自体では可能態においてあるのに対して、形相はそれ自体では現実態である。それゆえ、形相の本性は質料に存在を与えることで、質料の本性はその存在を受容することである。対して存在性は、それ自体における不分割と他のものからの分割の理拠が付加されることで、一性の原因であり、あるいは事物において一性と同じである。それゆえ、哲学者［アリストテレス］が『魂について』第 2 巻［第 1 章 412b4–9］で言うことには、なぜ質料と形相から一なるものが生じるのかという原因を問題とするべきではない。というのは、そのことの理拠は次の通りだからである。質料は可能態においてあるのに対して、形相は現実態である。そのことから帰結することには、形相が与えることを本性づけられている存在を、質料は受容することを本性づけられている。一性も同様である。実際、存在の原理と区別の原理は同じである」(I)。

quiditativum〕に即して変様することを保持するだけである。それゆえそれは、それ自体では区別するものではないのであり、そこからの帰結として、何らの区別の第一原因でもありえない[17]。

57. さらには、現実的存立はこれとあれにおいて同じ理拠に属しており、それは本性がこれとあれにおいてそうであるのと同様である。それゆえ、（第 1 問題の諸理拠［Cf. 第 28–29 段落］によって）本性がそれ自体ではこれではないのと同様にして、存立の存在もそれ自体ではこれに適当ではない。

58. さらには、あらゆる範疇的秩序づけ〔coordinatio praedicamentalis〕[18]においては、その秩序づけに属さない任意のものを例外化し排除するなら、その秩序づけに属する任意のものが見出されうる。しかるに、存立の存在は諸実体の秩序づけには属さないのであり、それは種とも差異とも類とも同様ではない。それゆえ、諸実体の秩序づけにおいては、存立の存在のことを理解するのでないなら、その秩序づけの内の任意のものがある。それゆえ、種と類は、現実的存立が理解される前に、範疇的秩序づけにおいてあるのと同様にして、そうした類の内の諸個体も、現実的存立が理解される前に、その秩序づけにおいてあることになる。

III. 意見を支持する諸理拠に対して

59. こうした理拠によって、他方の意見［すなわち第 55 段落］の諸理拠に対する解答は明らかである（なぜなら、［第 56–58 段落における］その諸理拠の結論を私は認めるからである）。

その理由は以下の通りである。「現実態が区別する」と言われる時、それは真である。現実態がある仕方とまさに同じ仕方によってそれは区別するからである。

60. そして［第 55 段落で］「最終的区別はその秩序づけの内の現実的最終物による」

---

[17] Cf. ドゥンス・スコトゥス『オルディナティオ』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 3 問題第 61 段落「本質存在（esse essentiae）と異なる限りでの現実存在は、それ自体が区別されても、限定されてもいないものである。（現実存在が、本質存在の諸々の差異と別に、固有な差異を有することはないからである。もし仮に有するとしたら、本質の体系とは別に、存在の固有な体系を措定することが必要となるであろう。）むしろ正しくは、現実存在は、他のものの限定によって限定されるものであり、それゆえ他のものを限定するものではない」（中世思想原典集成 I.18, p. 244）。ここでは、《esse exsistentiae》が仮にそれ自体で区別の原理であるなら、《esse essentiae》による区別の秩序づけ（coordinatio）とは別の秩序づけを持たなければならないという理由が述べられている。この点が『講義録』とは異なり特徴的である（I）。

[18] 範疇的秩序づけについては次も見よ：第 60 段落；第 91–92 段落；第 94 段落。

と言われる時、まずその最終物は存立の存在のことではない。しかるに、それが何であるかは後で［すなわち第 169–72 段落で］明らかになるだろう。それゆえ現実的存在は、内在的な現実的最終物であるのではなくて、範疇的秩序づけにおける諸事物の区別に付随する。それゆえ現実的存在による区別は、事物が能動者と対照される限りにおいて、或る仕方では存立による。――そしてそれゆえそうした区別は、事物が諸々の外在的原因と関連するようにしてある。そして事物は、範疇的秩序づけの内部で他の本質的存在に対するようにしては、現実的存在に対する可能態においてあるのではない[19]。

（いしだ・りゅうた　日本学術振興会特別研究員 PD／
慶應義塾大学文学部訪問研究員）
（ほんま・ひろゆき　東京大学大学院人文社会系研究科在学／
日本学術振興会特別研究員 DC）

[19] 本稿は、JSPS 科研費 18K12191 および 17J00136（石田）と 18J14369（本間）の助成を受けたものである。